

## 1 単なる交流におわらない国際連携プロジェクト

Asian students Exchange Program(ASEP), World Youth Program(WYM)は国際連携プロジェクトである。単なる国際交流プロジェクト、知識を広げお互いを知るための企画ではない。連携国相互が主体的連携の軸となり、推進するプロジェクトである。そこには、参加者が大きく変化成長する仕組みが埋め込まれている。

日本に住む人の 98 パーセントは日本人であり、私たちは日本語で生活している、英語を 10 年間学校教育の中で学んでいても日常生活の中で使うことはほとんどない。台湾も同じように環境にある。母国語だけで生活をしている。

しかしながら、世界が同時に動いている今、自国の将来、自分の将来、また世界の将来を考える上において、国際的な感覚、知識、体験という、**Grobal Competency** を持つことはこれからのアジアで活躍するうえにおいて大変重要である。それらを実践的に獲得する場事国際連携プロジェクトである。

## 2 WYM と ASEP

これら 2 つの国際連携プロジェクトは、ともに 20 年を超す継続的なプログラムである。一つは日本で、もう一つは海外、すなわち Homogeneous (同質) な環境と、Heterogeneous (異質) な環境での取り組みである。

参加者である高校生、大学生が協働でプレゼンテーションを作り上げるという作業が設定されている。この取り組みが Task であり、達成の後、自らを照らす OUTCOME が準備されている。文化の違う海外の学生と取り組むとき、協働作業は時に対決、争いが起こる、それは十分に予想されるものであり、これらを乗り越えることによって、ともに舞台に立ち、最終作品、英語プレゼンテーションという形で発表するのである。

いかに争っていても、発表の当日に逃げるわけにはいかないという設定がある。

この明確な OUTCOME は ICT によって記録される。動画、音声、写真などであり、困難な調整、英語でのディスカッションの挑戦のあと成長の足跡としてのこるマイルストーンでもある。

タスクベースな側面と、異なった文化を持った学習者の協働学習の側面がある。文化が異なること、コミュニケーションが異なることからその協働には「葛藤」「争い」が発生し、それらを「相互の尊重」「協働する力」Conflict resolution で解決していかななくてはならない。異なることを受け入れ、ともに学び成長する指針として Community of Inquiry の考え方で取り組んでいる。グループの質を高める Social Presence、異なることを前提に共有する工夫、PPT やデータの共有、提示 Cognitive Presence、教師の関り、学習フローに

対するコーチング Teaching Presence の3つの側面を実践する場である。

## 目標

Task-based な展開を、参加者（生徒、学生、教師）は達成する中で、project 全体のプロセスをこなし、グローバル人材に必要な資質を身に着ける。3つのステージで獲得する (kageto, sato, 2014)

**SEE** ・ ・ 訪問先の国を知る 人口 日本との歴史 最近の政治動向

**FEEL** ・ ・ ホームステイの体験 台湾のホスピタリティの実感 協働作成時の葛藤、協働

**INTERNALIZE** ・ ・ 振り返りにより、単に好きな国から、自分との生き方、国際人として生き様の中に経験を生かす

などの各ステージを意識し展開する。

## 英語発信力

Task の中で自由に英語を活用し、うまれた課題を英語表現を駆使して協働に至るまで粘りずよく取り組む

旅行英会話—日常生活—ビジネス英会話—二者間折衝—多数者間折衝・協議・調整の英語力（グローバル人材育成会議）の最高レベルの実践に取り組む

プレゼンテーションの実施によりアジアにおける国際共通言語として活用の在り方を学ぶ

## 3 支えとなる ID 理論

体験的な学びをする上において、KOLB の経験学習理論、の Community of Inquiry の考え方などである。(Garrison, 2000) また、WYM など日ごろ意見を寄せてもらっている John Kekker ARCS Model など大変わかりやすい。タスクベースラーニング (Reigeluth, 2000) もそうである。

これらの理論を反芻しながら、WYM、ASEP の事前に取り組んでいる。

## 4 参加者たちの学び

現地に行くまでにはいくつかの関所がある。パスポートコントロールを通過するのもその一つだし、ホームステイの体験も相手方文化の理解のために必要である。

まさに異文化の中に入っていく。街全体、イベント全体が「日本」を迎え入れる。

そのような中で、相手の目に映る自分の姿も確認することができる。

学校訪問、協働制作のなかで、そのコミュニケーションは、「対峙」を必要とされ、言葉を発することのなかで自分を表現し、関係を作り上げていく作業が必要となる。

## 5 タスクがタスクを支える

生徒、教師の ASEP 参加タスクを見ると次のようになる。

### 生徒のタスク

台湾や交流校について知る See

事前に交流 ZOOM, Skype 会議準備 SEE FEEL

旅行の準備、現地へ、入国 SEE FEEL

ホームステイ、大学ドミトリー滞在 FEEL

学校訪問、歓迎会 SEE FEEL

協働プレゼンテーションの完成 FEEL SEE

英語でのディスカッション 対立、宥和、協働 創造への葛藤 SEE、FEEL

舞台上での発表 FEEL Internalize

他校、参加国のプレゼンテーションを聞く、評価する SEE FEEL

別れ—振り返り アンケート Internalize

### 教員のタスク

WYM、ASEP の実行委員会へ参加 目的、概要、学び会の確認 SEE

WYM 参加で、到達の目標イメージを掴む SEE

主旨を参加校校長、教員に説明 参加許可を得る SEE

参加学生の募集 SEE

趣旨説明 SEE

学校の環境を活用し事前交流を実現する ZOOM 会議など SEE FEEL

台湾への旅行 旅行者との打ち合わせ 実施 SEE

対応校との協議 SEE FEEL

グループ指導の相手側教師との衝突、解決 FEEL

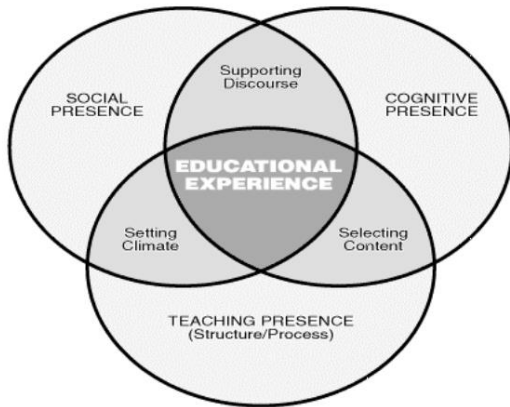
参加生徒の相手側との意見調整の指導 (Conflict Resolution 指導)

生徒の学習活動への積極評価 INTERNALIZE

教員として何がなしたのか、自らの成長の確認 INTERNALIZE

Relretive Learning の実践 (生徒の振り返り、発見支援、スキヤフオールディング)

## Community of Inquiry



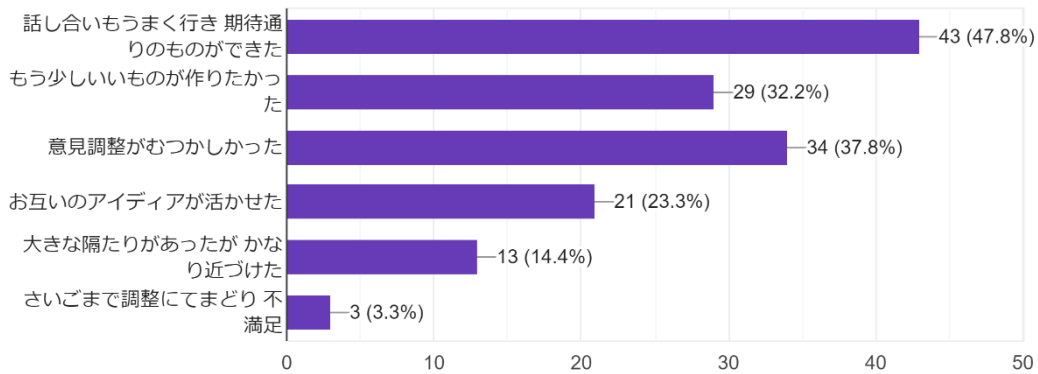
## 6 アンケート結果

帰国後参加者（高校生、大学生）にアンケートを取った。回答数 92 名（2020 年 1 月 14 日現在）

意見調整がむづかしいという課題に取り組みながらも、「期待通りのもの」を作り上げた満足感がうかがえる。

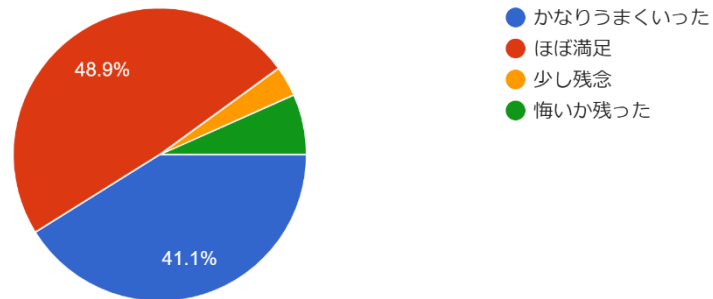
### 協働プレゼンテーションについて 複数選択可能

90 件の回答



## 当日のプレゼンテーション

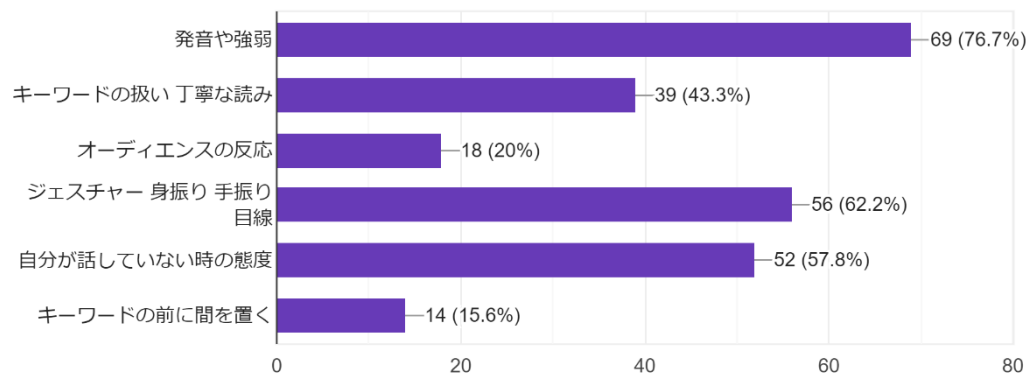
90件の回答



オーディエンスの理解を意識した工夫が増えてきている。特に今年は、ゆっくりと発音や強弱（Prosody）に留意したことがうかがえる。

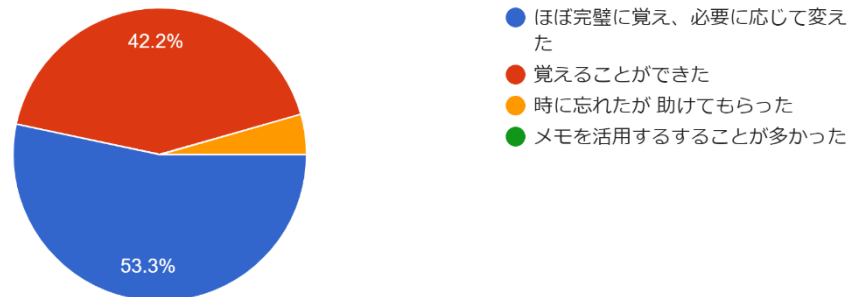
## プレゼンテーションで気を付けていること 複数回答可能

90件の回答



## スクリプトの扱い

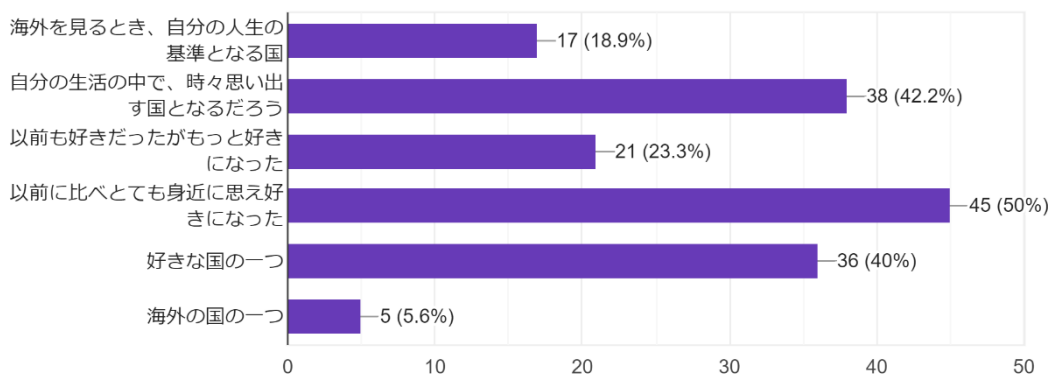
90 件の回答



滞在国に対する意識は、単に提示の「楽しかった、いい思い出」から脱し、「生活の中で思い出」「基準となり」「もっと好きになった国」と述べている。

## 台湾について複数選択可

90 件の回答



## 7 考察

世界と接すればますます日本が見えてくるのが参加者の実感ではなかろうか。

相手を知り、自らの国も理解するために 20 年間継続してきた「共に協働プレゼンテーション」「ともに舞台上で発表する」という Task-based Learning でもある国際連携イベントはその特徴をさらに高めながら今年度実施された。

やや主すると、アカデミックな評価だけで終わりがちな Social Study, 英語教育に、交際的な体験の場を国内の約 20 校の連携により実現し、意義ある「国際協働学習」に取り組むことが出来た。

国際交流という「思い出」作りにおわってしまう従来の「国際理解教育」をさらに高めるデザインの継続は今後も推進されるべきである。経験学習という視点からプロジェクトを俯瞰すると、振り返りのデザインを現在作成しつつあるが、web、アンケートの共有、レポートの共有以上に、多国間での新しい連携が必要となりつつある。

#### 参考文献

Garrison, D. R., Anderson, T., & Archer, W. (2000)

Charles M. Reigeluth Instructional-Design Theories & Models, Vol. IV: The Learner-Centered Paradigm of Education

Willis, D. and Willis, J. Doing task-based teaching. Oxford: Oxford University Press, 2007.

H24 グローバル人材育成会議まとめ

<https://www.kantei.go.jp/jp/singi/global/1206011matome.pdf>

asep サイト

<http://www.kageto.jp/asep/2019/>

WYM サイト

<http://www.japannet.gr.jp/w2019/>

#### 資料 1

日本福祉大学	Nihon Fukushi University
立命館大学	Ritsumeikan University
関西大学	Kansai University
立命館中学高等学校	Ritsumeikan Junior & Senior High School
日本福祉大学附属高等学校	Nihon Fukushi University Affiliated High School
南山国際高等学校・中学校	Nanzan Kokusai Junior & Senior High School
福井県立丸岡高等学校	Maruoka High School
福井商業高等学校	Fukui Commercial High School
立命館中学校・高等学校	Ritsumeikan Junior & Senior High School
立命館宇治中学校・高等学校	Ritsumeikan Uji Junior & Senior High School
奈良育英高等学校	NARA IKUEI Sr. High School
神戸大学附属中等教育学校	

名古屋市立名古屋商業高等高校	Kobe University Secondary School
大阪市立東高校	Nagoya City Nagoya Commercial High School
立命館守山高等学校・中学校	Osaka City Higashi Senior High School
関西学院千里国際中等部・高等部	Ritsumeikan Moriyama Junior & Senior High school
奈良県立郡山高等学校	Senri International School of Kwansei Gakuin
兵庫県立川西緑台高等学校	Koriyama High School
	Kwanishi Midoridai High School.

**参加国 7ヵ国**

日本 台湾 インドネシア ニュージーランド 韓国 ベトナム インド